第７節　中原４号墳出土鉄鏃について

菊池 吉修

はじめに

中原古墳群では、３号墳、４号墳、６号墳から鉄鏃が出土している。東駿河における後期古墳の出土品として鉄鏃はけっして珍しいものではない。しかし、多くの場合、１基あたりの鉄鏃出土数は 10 数本以下であるなか（第 16 表）、４号墳からは 100 本を超える鉄鏃が出土していることは注目に値しよう。古墳時代を通し、駿河・伊豆では、１基あたりの最多出土量である。そこで、ここでは中原４号墳出土の鉄鏃についてまとめるとともに、鉄鏃から読み取れる古墳の位置づけ等を考えてみる。

１　東駿河の鉄鏃研究

古墳時代の鉄鏃研究は後藤守一、末永雅雄の研究（後藤 1939、末永 1941）を端緒とし、地域的な研究を経て、後藤の研究を継承的に発展させた杉山宏一による分類・編年の提示により研究の一到達点が示された（杉山 1988）。その後、研究視点の多様化が進むとともに、地域的研究及び広域対象の研究は更に深化し、再整理された基準による分類方法も示されている（水野 2007 他）。

東駿河の鉄鏃は、まず広域研究の中で地域的特性として五角形式鉄鏃の分布が注目されてきた（杉山 1988・水野 1995）、その後、静岡県下の古墳出土鉄鏃集成が行われる過程で地域的な様相がまとめられ（長谷川 2003、井鍋 2003）、更に、大谷宏治によりその特徴がより明確にされた（大谷 2004）。また、集成以後に刊行された報告書等においても議論が深められている（菊池 2008、大谷 2010、藤村 2011）。

これら一連の研究から、駿河東部における鉄鏃の特徴は、以下の様にまとめられる。なお、本稿では各部位の名称や分類、編年等は、大谷 2003 に準拠する。

① 多種少量の平根と少種多量の尖根の組合せが一般的（長谷川 2003、註 1）

②平根は五角形式の占める割合が高く、尖根の主流は三角形式、長三角形式、柳葉式、片刃箭式、鑿箭式（長谷川 2003）

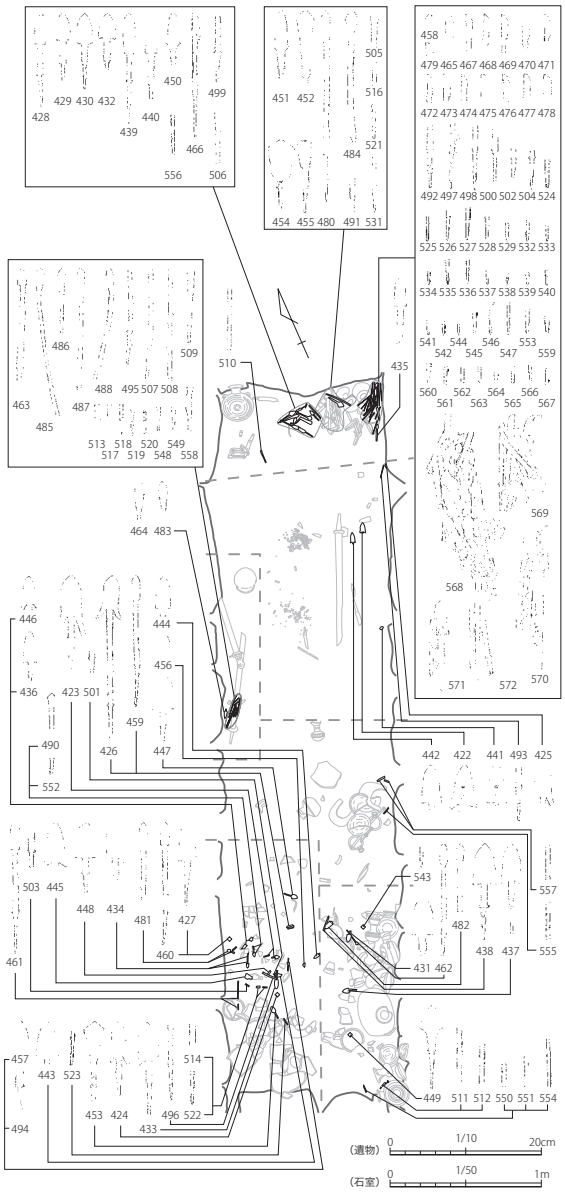
③出土鉄鏃の組み合わせから、五つの小地域が設定できる（井鍋 2003）。

２　出土位置と鏃構成

概要　中原４号墳には残存する鏃身部数等から 131 点以上の鉄鏃が副葬されていたといえる、このうち鏃身の形状が判明するものは平根が 43 本、尖根が 53 本である。

平根では、腸抉柳葉式が５点、長三角形式が 27 点、腸抉三角形式１点、五角形式３点、撫関三角形式３点、圭頭式３点、方頭式１点が出土している。

尖根は、柳葉式が７点、片刃箭式 34 点、鑿箭式が



第 193 図　鉄鏃出土状況

13点出土している。

出土量もさることながら、平根鏃の多様性も特徴の一であり、多種多量の平根と小種多量の尖根を持つ古墳といえる。ただし、出土位置からは複数の鏃群に分けることができ、各鏃群の鏃構成は一様ではない。そこで、次に出土位置別の状況を概観する。

Aエリア　銹着した鏃束を含め鏃身形態が把握できるものが60点出土している（第195図）。4号墳中最もまとまった出土量であり、4号墳の中心的な被葬者に伴う副葬鏃群と理解される。

このうち、平根は21点が確認でき、長三角形式15点、圭頭式2点、方頭式1点、撫関三角形式2点、五角形式1点である。5種に大別したが、長三角形式は銹着して出土した8点（568）は形状・法量とも規格性の高さがうかがえるものの、そのほかのものは、断面形状や、腸抉の有無、フクラの張り具合、茎関の形状などの細部の違いが多岐にわたる。また、圭頭式の2点も全くの同一形状とはいえず、Aエリアの平根は多種多量の構成といえよう。

尖根は39点出土しており、このうち34点が片刃箭式、4点が鑿箭式、1点が柳葉式である。片刃箭式の主体は、鏃身長が2.9～3.2cm、鏃身関が角関あるいは極浅い腸抉、茎関が棘関となるものであるが、例外的に刃部断ち落しのものが1点、深い逆刺を持ち茎関が角関となるものが1点混ざる。鑿箭式のうち2点は銹着し詳細を把握できないが、残る2点はそれぞれ鏃身部の形状が異なる。Aエリアの尖根は、規格性の高い片刃箭式鏃群に少数の異なった形状の鏃が加わる構成といえる。

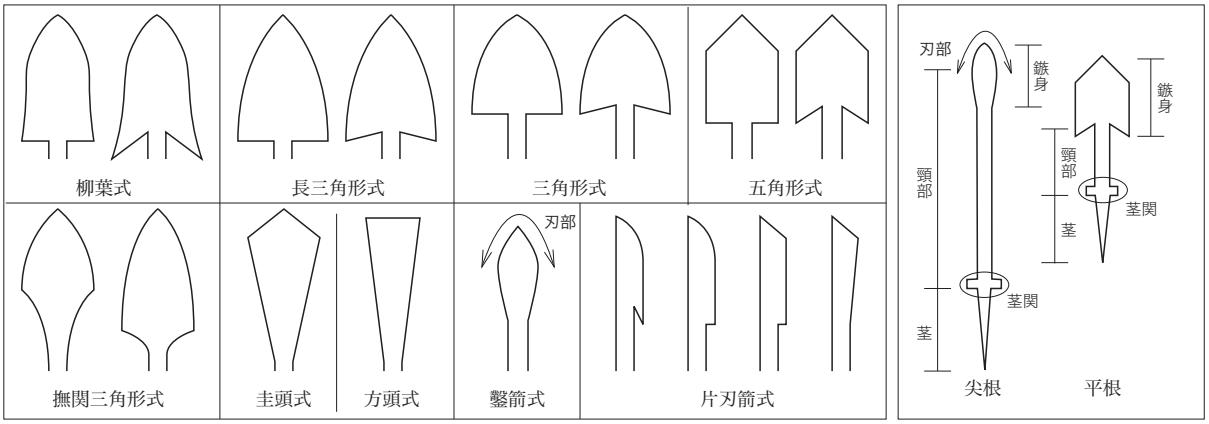
以上より、Aエリアは多種多量の平根系鏃群と小種多量の尖根系鏃群の構成といえる。ただし、全点が一括の束であったのか、複数の束であったのかは判然としない。なお、Aエリアでは茎関が台形関・角関の鏃と棘関の鏃が混在する。ただし、角関の平根柳葉式と棘関の尖根片刃箭式が銹着して出土しているため、棘関の鏃束と角関の鏃束が別個にあったとは考え難い。また、平根鏃は鏃身と頸部を合わせた長さにより長（428・439・451・452・571）、短（429・430・432・435・340・454・455・568）の2群に区分できる。それぞれで一群を成していた可能性はあるものの、推測の域を出るものではない。

Bエリア　Bエリアでは4点の平根が出土した。うち2点は短茎鏃で、1点は方形、もう1点は円形の穿孔を持つ。残る2点の平根は、1点が重抉の腸抉柳葉式、もう1点は角関長三角形式である。なお、このほかにも鏃身形状不明な破片が1点出土している。

以上、Bエリアは細部形状の異なる平根鏃のみで構成される鏃群であるといえる。

Cエリア　Cエリアでは鏃身形状が把握できた7点はいずれも、尖根のみであった。このうち5点が鑿箭式、2点が柳葉式である。鑿箭式のうち3点の鏃身は平造りであるが、486と487は頸部から刃部に向け緩やかに幅を広げるタイプである。一方、485は鏃身幅が頸部幅の3倍近くあり、前2者とは異なった印象を受ける。鑿箭式の残る2点の鏃身は、488が片丸造り、483は片鎬造りである。

Cエリアは細差を持つ小種の尖根で構成される鏃群と



第194図　鉄鏃名称・各部位

いえる。なお、Ｃエリアでは鏃身数以上の頸部～茎又は茎のみの破片も13点出土しており、本来的な副葬鏃数は７点以上であったと推測される。

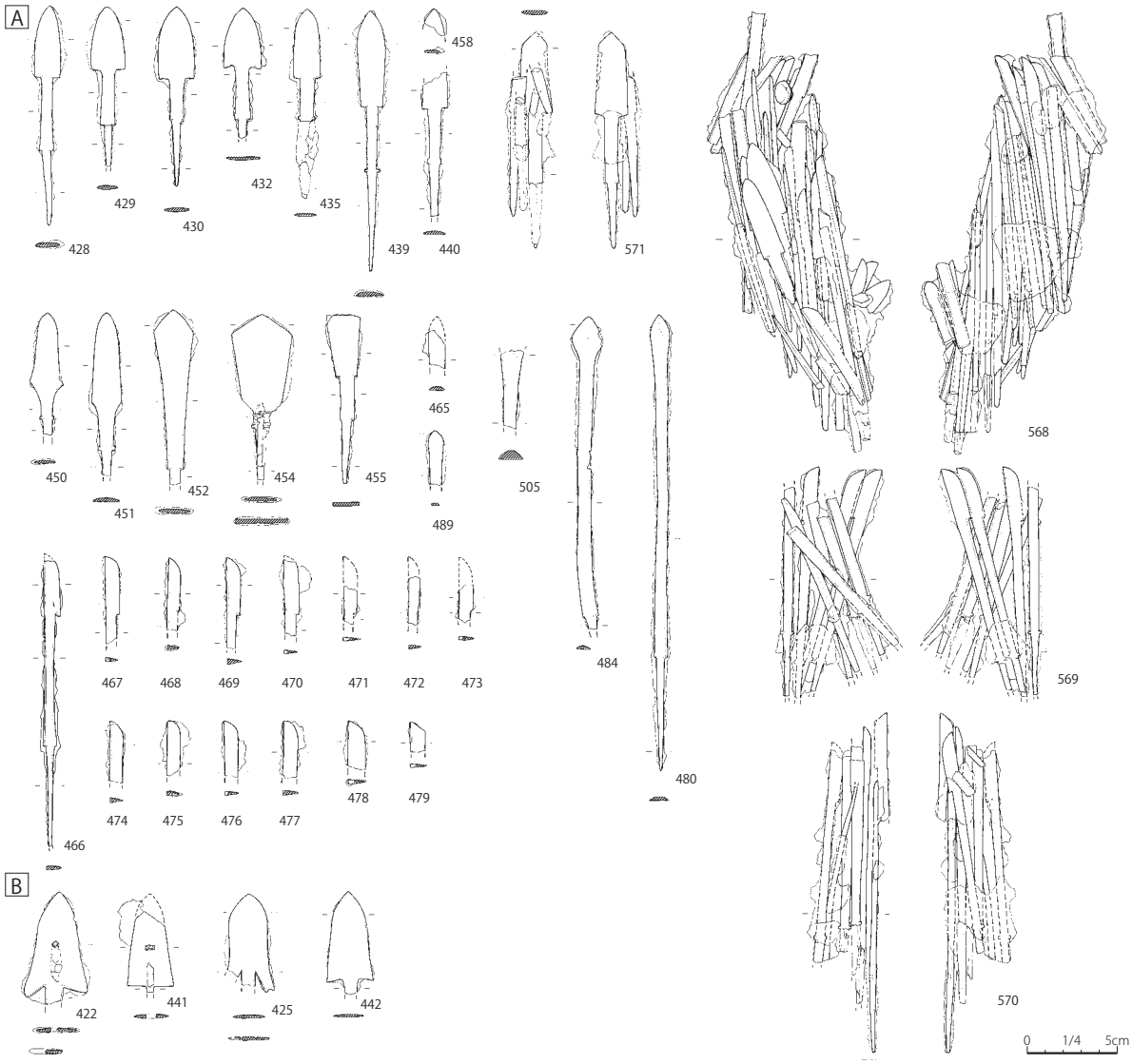
Ｄエリア　Ｄエリアでは、頸部の破片が２点出土しているが、鏃身形状は不明である。

Ｅエリア　Ｅエリアでは、４点の平根と２本の尖根が出土している。平根のうち２点はフクラの張る腸抉長三角形式、１点は角関長三角形式、１点は駿河では類例が少ない撫関三角形式鏃である。フクラの張る腸抉三角形式は形状および法量が近似する。角関長三角形式鏃は、Ｅエリア出土の他の平根と異なり、茎関が角関である。

尖根は角関柳葉式と鑿箭式が１点ずつであり、統一感を欠く鏃群という印象を受ける。なお、頸部のみの破片や茎のみの破片も出土していることから、更に数点の鏃がＥエリアに副葬されたいたことがうかがえる。

Ｆエリア　鏃身形状がうかがえるものが19点出土しており、出土数はＡエリアに次ぐ。このうち、14点が平根、５点が尖根である。尖根は、角関長三角形式と鑿箭式の２種に限られる。

平根は長三角形式７点、腸抉柳葉式３点、五角形式２点、腸抉長三角形式１点、圭頭式１点に加え形状が特定できないものの平根鏃とみられる破片も２点出土している。腸抉長三角形式と圭頭式を除く形態は複数本が出土しているが、それぞれ細部に差異を持つ。まず、腸抉柳葉式は２点が重抉、残る１点は他２点に比べ長頸化が著しいという違いがある。長三角形式では、腸抉を持ちフクラの張るもの２点（433・434）、フクラが張らないもの（445）、浅い腸抉のもの２点（436、444）、角関のもの２点（427、443）に細別できる。また、２点の五角形式も茎関が棘状と角状という違いがある。

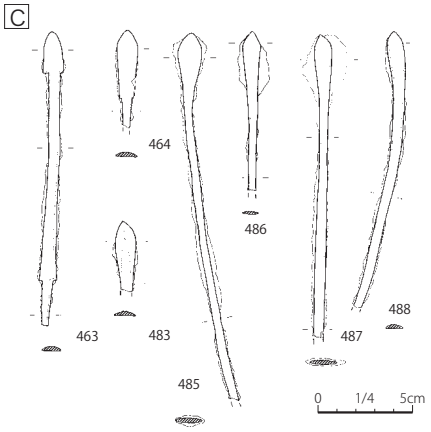


第195図　Ａ・Ｂ群出土鉄鏃（初葬鏃）

3　出土鏃の形態と時期

(1) 特徴的な形態の鏃

先述のとおり４号墳からは、多様な平根が出土した。このうち、方頭式（Aエリア）、圭頭式（A・Fエリア）、撫関三角形式（A・Eエリア）は東駿河では古墳時代全体を通しても類例が限られ、腸抉柳葉式（B・Fエリア）に至っては周辺に類例が看取できない形態である。それぞれ、分布の偏在性が指摘される形態の鏃であり、方頭式は圭頭式と共に瀬戸内〜九州に分布の中心、撫関三角形鏃は主に畿内〜西日本に分布し（杉山 1988、尾上 1993、水野 1995）、東海では伊賀・伊勢・三河・遠江に分布する傾向が指摘されている（大谷 2004）。また、腸抉柳葉は駿河・甲斐では少なく、東海西部に偏在する傾向が指摘されており（大谷 2004）、重抉の近似例としては愛知県北長尾３号墳等があげられる。



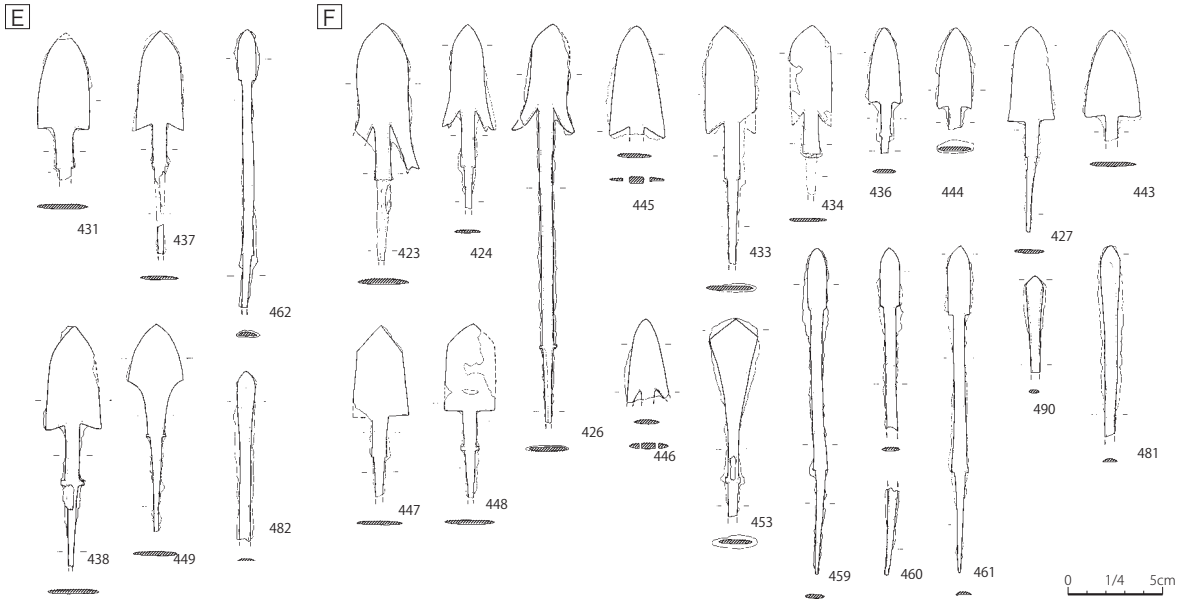
第 196 図　C 群出土鉄鏃（追葬鏃）

その一方で、長三角形、三角形、五角形は東駿河における平根の主体的な形態と指摘されており（長谷川 2003）、中でも長三角形は古墳時代後期における東海・甲信地方の主要形態、三角形式は東海東部と甲信地方で多く出土する形態といわれている（大谷 2004）。

また、中原４号墳からは短頸鏃も出土しているが、古墳時代後期における無頸・短頸鏃の分布圏は静岡県以東の東日本と指摘されるとおり（水野 1995）、東駿河では短茎鏃が一定量出土している。なお、尖根は大きく３種に区分できるが、鑿箭、片刃箭、柳葉式のいずれも東駿河では一般的な形態と言える。

以上より、中原４号墳出土の鉄鏃は、東駿河における一般的な形態に（第 198 図）、西日本及び東海西部以西に分布の中心を持つ形態の鏃が複数本加わることで、平根の多様性が形成されているといえる。さらに、ここでは中原４号墳出土鉄鏃の多様性を特徴づけるものとして、分布の中心が西日本にある鏃形態といわれる方頭式と圭頭式に注目したい。

方頭式　方頭式は東駿河の主流形態ではないが、７世紀代には一定量が出土している（大谷 2004）。しかしながら、中原４号墳出土例は鏃身関と茎関をもち鏃身、頸部、茎が角関により区分されているという特徴があり、当地域では類例を看取できない。視野を分布の中心といわれる西日本に転ずると、福岡県川島５号墳や岡山県岩田 14 号墳、福岡県下渕名子 11 号墳出土鏃の中に比較的類似する形態がみられる（第 199 図）。



第 197 図　E・F 群出土鉄鏃（初葬・追葬混在）

東駿河における方頭式は鏃構成の主要形態とはならない散発的な出土で、形状的統一性もうかがえないことから、中原４号墳出土の方頭式を含め東駿河の方頭式は、西日本とのつながりによりもたらされたものと理解したい。ただし、製品自体の搬入か、情報伝播による在地生産であるのかは特定しがたい。

圭頭式　圭頭式は、東駿河では古墳時代をとおして見られず、近隣では７世紀末葉の伊豆の横穴で１例が出土しているのみである。遠江では後期古墳から数例の出土が確認できるが、中原４号墳のような棘関のもの（453）や鏃身幅が著しく広いもの（454）は見られない。

中原４号墳では平根、尖根の両者で棘状の茎関を持つものが確認できる。他の鏃と並び製作される過程で、圭頭式にも棘関が取り入れられた可能性がある。ただし、圭頭式は東海東部では、TK43 型式期ではほぼ副葬されなくなり、畿内を経ない西日本との交流を見出すには良好な資料とも指摘されている（大谷 2004）。西日本においては、岡山県川戸２号墳や、同県段林古墳、徳島県山田Ａ２号墳、大分県飛山８号横穴等に棘関を持つ圭頭式の類例を求める事ができる。方頭式と同様に西日本との関連性をもつものと理解したい。

いっぽうで、著しく幅が広い圭頭式は、類例は見出し難い。福岡県東田 20 号墳、大分県羽野２号横穴、福岡県極楽寺３号墳例などが比較的近い例といえるであろうか。

ここでは圭頭式に分類したが、中原４号墳出土例のものは、一般的な圭頭式とは異なり頸部を持つ。しかしながら、頸部には木質が付着し矢柄に呑み込まれていたことがうかがえる。頸部を持つ鉄鏃の同様の装着方法は沼津市秋葉林１号墳の飛燕式鉄鏃で見られ、新来型式の鏃が伝統的な無頸・短頸式と同様の装着方法を採る背景に、鏃がもつ祭祀的側面が見出されている（大谷 2010）。なお、三島市小平Ｂ１号墳からは、鏃身幅が広くフクラが強調された鉄鏃が出土している。小平Ｂ１号墳例は柳葉式の鏃身部を広大化することで儀器としての鉄鏃を強く示したものと理解できるが、中原４号墳出土例も圭頭式が柳葉式等の他の形態の影響を受けながら、伝統的な手法で矢柄に装着することで、「平根」の儀器的側面を強く意識した鉄鏃と解釈したい。

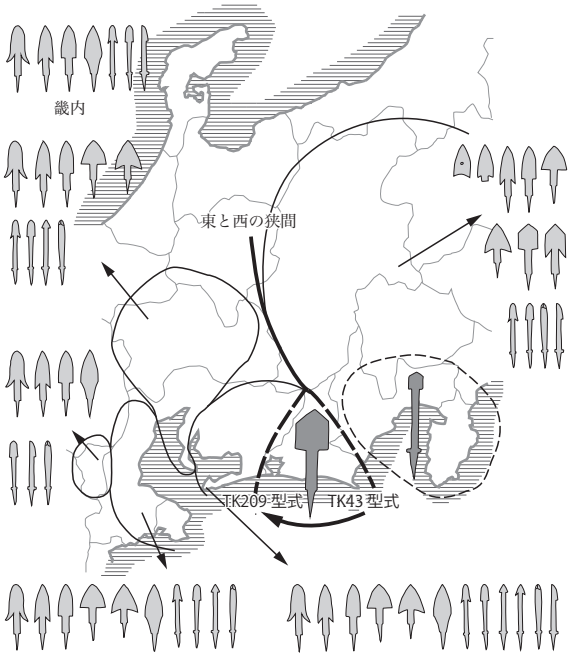
（2）形態別時期

中原４号墳出土鏃は、平根、尖根とも「TK43 ～ 209 型式期に駿河・遠江から姿を消すあるいは出土量が減じるもの」、「新たに出現するもの」、「古墳時代後期を通じて見られるもの」の３者が混在する（註 2）。

まず平根では、圭頭式が TK43 型式期、撫関三角形式が TK43 ～ 209 型式期で駿河・遠江からほぼ姿を消す形態である（註 3）。ただし、棘関の圭頭式は TK43 ～ TK209 型式期の所産とされ（水野 1995）、類例に掲げた古墳も概ねこの時期のものであることから、角関の圭頭式は TK43 型式以前、棘関の圭頭式は TK43 ～ TK209 型式期に位置づけたい。撫関三角形式は、いずれも棘状の茎関であるため、この形態の最終段階のものと考えられ、鏃身部が三角形のものが TK43 型式期、長三角形のものが TK43 ～ 209 型式期に位置づけられよう。

一方、五角形式はこの時期に出現する形態である。ただし、中原４号墳例は鏃身関に対しフクラの幅が狭いという五角形式の初現段階の特徴を持つことから TK43 ～ 209 型式期のものと考えられる。

長三角形式は、東駿河では古墳時代後期を通じて見られる形態であるため、時期は特定し難い。ただし、棘関のものみられることから上限は TK43 型式期といえ、TK217 型式期以降は出土例が減少することが指摘されていることから、TK43 ～ 209 型式期の慨然性が高い。短頸式も駿河・遠江では TK217 型式期まで残る形態であり帰属時期を特定し難いが、東駿河での出土例は



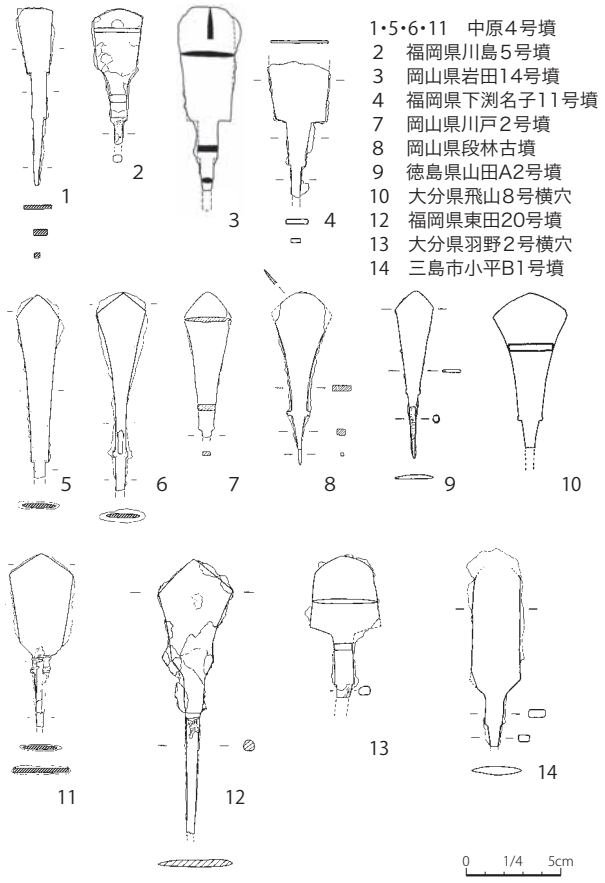
第 198 図　古墳時代後期前半　鉄鏃の地域色（東海・甲信）

TK43 ～ 209 型式期に多いことから、この時期の所産と考えたい。

なお、方頭式は例示した川島 5 号墳が初葬は TK43 型式期、岩田 14 号墳が 6 世紀中葉～後葉、下渕名 11 号墳は 7 世紀後半であるため、TK43 型式期以降の所産と考えられる。腸抉柳葉式は出土例が減少する TK209 型式期以前のものと考えられるが、長頸化したものは時期を違える可能性がある。

尖根は、この時期以降に現れるものとして、茎関が棘関となる片刃箭鏃と、刃部裁ち落としの鑿箭鏃が上げられる。一方で、茎関が台形関・角関のものはこの時期以降、著しく数を減じる。

柳葉式は確認可能な茎関は全て台形関又は角関であることから TK43 ～ TK209 型式期以前、片刃箭式の主体となる鏃身関が角関又は極浅い逆刺を持つものは TK43 形式期以降、鑿箭式は TK43 ～ 209 型式以前のものと以降のものが混在するといえる。なお。深い腸抉を持つ片刃箭式は MT15 ～ TK10 型式期あるいは更に 1 段階古い時期の可能性が考えられる。



第 199 図　方頭と圭頭鏃

(3) 副葬時期

では、次に出土位置別の時期と副葬時期について検討したい。

初葬に伴うと考えられるのは、AエリアとBエリアの鏃である。Aエリアは茎関が台形関・角関のものと棘関のものが混在している一方で、角関の圭頭式や腸抉が明瞭な片刃箭式など古相の鏃が含まれることから、TK43 型式期に収まるものと考えられる。ただし、平根における棘関の採用は尖根よりも遅いといわれていることや(関 1986)、五角形式が含まれていることを勘案すると TK43 型式期の中でもやや新しい時期の可能性がある。

Bエリアは、出土鏃からは時期を特定し難い。ただし、供伴する大刀がCエリア出土の大刀より古いことから、Bエリアの鉄鏃は初葬に伴うもので、Aエリアと同時期のものと考えたい。なお、Bエリアは平根のみで構成されており、意図的に他の鏃束とは異なった扱いをされていたものとみられる。

追葬に伴うと考えられるのは、Cエリアの鏃束である。CエリアもBエリアと同様に大刀と共に出土しているが、供伴する大刀がBエリアより後出するものであることと、Aエリアの鑿箭式に比べ後出的要素である端刃造りのものが含まれることから、CエリアはA・Bエリアより新しい時期の被葬者に伴うものと考えられる。時期としては端刃造りの鑿箭式は TK209 型式期以降に多くなる傾向があることから TK209 型式期と理解したい。

のこるD～Fエリアは、初葬、追葬の別を出土鏃から判断することは難しい。ただし、FエリアにはCエリアと同様の端刃造りの鑿箭鏃が含まれることから、追葬に伴う鏃が含まれている可能性がある。しかし、その一方でBエリアと共通する腸抉柳葉式鏃もFエリアでは出土しており、Bエリア出土の腸抉柳葉式鏃とFエリア出土の腸抉柳葉式長頸鏃は逆刺部の形状はことなるが、鏃身部の法量は極めて近いことから、Fエリアには初葬に伴う副葬鏃も含まれると考えられる。

なお、Aエリアの平根を見ると、鏃身形態は同じでも、細部をそれぞれ違えているものや（428 ～ 430、432)、大形のものと小形のものが組み合わされていることがうかがえる（435 と 439、450 と 451)。初葬の副葬鏃においては、細部を違えた鏃の組合せを志向していると考えるのであれば、Fエリア出土の棘関の圭頭式は、Aエリア出土の角関の圭頭式と組み合うもの、五角形鏃の

447 と 448 は茎関の形状を違えた組合せ、腸抉長三角形式の 433 と 434、腸抉柳葉式の 423 と 424 はそれぞれ大小の組合せと言え、初葬に伴うものの可能性が考えられる。

Ｅエリアは Ｆエリアと同タイプの尖根が出土していることから、尖根は Ｆエリアと同時期のものと考えられる。一方、腸抉長三角形式の 437 と 438 を大小の組合せとみるのであれば、平根の中には初葬に伴うものが含まれる可能性がある。

4　鉄鏃からみた中原４号墳

(1) 東駿河の鉄鏃出土古墳

ここで、あらためて、東駿河における鉄鏃の出土傾向を概観したい。

東駿河及び伊豆において発掘調査が行われた古墳は 200 基を越えるが、鉄鏃が出土したのは、このうち 108 基である。概ね半数の古墳が鉄鏃を保有するといえる。なお、横穴は 300 基余りの計測が行われ、このうち約 140 基が図化されているが、鉄鏃出土が確認されているのは、14 基に過ぎない。遺存状況や調査状況の違いもあるため断定するものではないが、横穴は石室墳とは鉄鏃出土傾向が異なる可能性が高いとみられるため、ここでは横穴を除いて考えることにする。

まず、東駿河において 1 基辺りの鉄鏃出土量は、10 点以下の古墳が全体の半数以上を占め、10 本を越えると振幅を繰り返しながら漸移的に数を減じ、20 点を越えるものは 22 基である。20 点を超えると古墳数は断続的な分布となり、30 点を越える古墳は 1 割程度となる（第 201 図）。

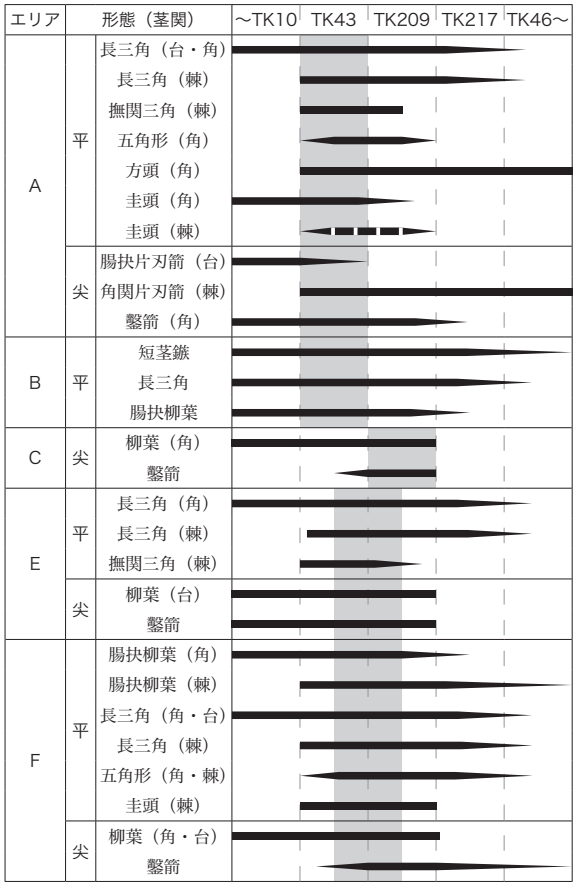
岩原は東海地方では 20 点以上を副葬する古墳は階層が高いことを指摘し（岩原 2001）、大谷も 20 点以上副葬する古墳は古墳時代終末期に至るまで階層的に上位であることを追認している（大谷 2003）。20 点を越える鉄鏃を出土した古墳は注目すべき鉄鏃多量副葬古墳と捉えて差し支えないであろう。この観点からみると、中原 3 号墳、4 号墳は鉄鏃多量副葬古墳といえる。特に 4 号墳はＡエリアだけでも特筆に値する出土量である。

ここで、東駿河における鉄鏃出土古墳の埋葬施設の規模を見ると（第 203 図）、平均規模は約 6.1㎡であり、床面積が 9.0 ～ 10.5㎡に一定程度のまとまりを示すグループがあるが、9.0㎡以上は隔絶した規模の古墳と見なすことができよう。

次に、埋葬施設の規模と鉄鏃出土本数を対比すると（第 204 図）、面積と出土本数は比例していないことがいえる。むしろ、鉄鏃多量副葬古墳は、埋葬施設の規模としては平均的な古墳でみられる。ただし、各氏により指摘されるとおり（岩原 2001、井鍋 2003、大谷 203）鉄鏃多量副葬古墳では、飾大刀や馬具等を伴っており、副葬品からは階層的上位の被葬者をうかがうことができる。

ところで、東駿河における鉄鏃の多量副葬については多種多量タイプ（谷津原 6 号墳）、同種多量タイプ（清水柳北 3 号墳）があり、それぞれが鉄鏃の流通経路を掌握していたと指摘される（井鍋 2003）。中原 3 号墳は同種多量タイプ、4 号墳もＡエリアに注目するのであれば、同種多量タイプといえる。また、西日本においては 30 点以上を副葬する古墳と鍛冶関連遺跡との関連性が言及されている（尾上 1993）。

ここで、鉄鏃多量副葬古墳の所在地区と時期、そして規格性をみると、1 ～ 4 のいずれの地区においても、1 期と 2 期では同数程度の鉄鏃多量副葬古墳が存在する



第 200 図　鉄鏃時期

第 16 表　東駿河・伊豆の鉄鏃出土古墳

	古墳名	地域	鉄鏃数			鏃構成率		時期	墳丘規模	石室面積	大刀	馬具	弓具
			総数	平根	尖根	平根	尖根						
1	室ノ坂 A1-2	1	7	1	6	14%	86%	3		2.15			
2	室ノ坂 B1-2	1	4	0	4	0%	100%	3		2.12	○		
3	室ノ坂 E1-1	1	1	1	0	100%	0%	3		1.24			
4	室ノ坂 E2-1	1	6	1	4	17%	67%	3	8.0	1.89	●		
5	室ノ坂 A3-1	1	1	0	1	0%	100%	3			○		
6	室ノ坂 D3-1	1	2	0	2	0%	100%	3	12.7	4.24			
7	室ノ坂 B4	1	32	0	32	0%	100%	3	10.0	6.43	●		
8	室ノ坂 D4-1	1	1	0	1	0%	100%	3	5.8	6.50			
9	山王 J4-2	1	16	0	13	0%	81%	4		3.10			
10	山王 N4-2	1	1	0	1	0%	100%	4		4.04			
11	妙見 I2	1	24	4	12	17%	50%	3		1.73			
12	妙見 F0	1	2	0	0	0%	0%	3		1.58	○		
13	妙見 F1	1	12	1	11	8%	92%	3		2.84	●		
14	谷津原 2	1	25	1	24	4%	96%	2	9.0	7.54	○		
15	谷津原 6	1	57	26	31	46%	54%	1	17.0		○		
16	谷津原 7	1	29	3	26	10%	90%	1～2		9.35		○	胡
17	谷津原 8	1	14	0	14	0%	100%	2		10.38	●		
18	谷津原 12	1	14	10	4	71%	29%	2～3		5.25			両
19	谷津原 15	1	12	6	6	50%	50%	2		3.16			両
20	谷津原 16	1	14	2	12	14%	86%	1		4.13	●		
21	谷津原 17	1	26	3	23	12%	88%	2	9.4	6.46	●		
22	中原 3	2	31	6	25	19%	81%	1	7.5	3.49	○		
23	中原 4	2	131	43	54	33%	41%	1	11.0	5.29	●	●	
24	中原 6	2	18	0	9	0%	50%	3			○	○	
25	中村上 1	2	3	3	0	100%	0%	2		4.77			
26	東平 1	2	12	5	7	42%	58%	2	13.0	6.89	●	●	
27	土手内 1	2	9	0	9	0%	100%	3		7.20			
28	横沢	2	19	7	12	37%	63%	1	16.0	19.09		●	
29	国久保	2	55	3	50	5%	91%	2	8.0	5.05	●	○	
30	大坂上	2	13	4	9	31%	69%	2	17.0	15.78	●		両
31	比奈 G74	2	7	5	2	71%	29%	1～2	7.0	7.49	●		
32	かぐや姫	2	20	17	3	85%	15%	2	15.0	10.46		○	
33	赫夜姫 2	2	1	1	0	100%	0%	3		3.87			
34	花川戸 1	2	2	1	1	50%	50%	2	9.6	4.53			
35	花川戸 3	2	2	0	2	0%	100%	3		3.67	○		
36	富士岡 F22	2	20	4	13	20%	65%	3		7.98			
37	間門 E6	2	3	0	3	0%	100%	1		4.95	○	○	
38	大塚団地 2	2	1	1	0	100%	0%	3		6.25			
39	須津 J6	3	15	0	15	0%	100%	1	13.0	7.80	●	○	
40	須津 J159	3	19	11	8	58%	42%	2	9.8	6.65	●	○	両
41	中里大久保	3	44	2	28	5%	64%	2	12.0	9.00	●	○	
42	中里 K-97	3	3	1	2	33%	67%	1			○		
43	中里 K-98	3	16	1	7	6%	44%	1			○	○	
44	中里 K-99	3	13	3	10	23%	77%	1			○	○	
45	船津寺ノ上 1	3	25	2	23	8%	92%	1	22.5	15.75	○		
46	船津 L-62	3	29	9	20	31%	69%	2		9.50	●	●	両
47	船津 L-206	3	7	0	6	0%	86%	1		4.43	○		
48	船津 L-208	3	2	1	1	50%	50%	2	8.0	5.20			
49	船津 L-209	3	7	4	3	57%	43%	2	9.0	3.24	○	●	
50	船津 L-210	3	2	0	2	0%	100%	2	7.9	4.12	○		
51	船津 L-211	3	3	0	3	0%	100%	3	10.0	4.75			両
52	船津 L-212	3	12	1	11	8%	92%	1～2	12.1	6.96	○		
53	船津 L-214	3	18	0	3	0%	17%	2	4.3	1.17	○		
54	船津 L-117	3	6	2	5	33%	83%	1～2	9.0	4.16			
55	石川 2	3	11	2	9	18%	82%	2	8.0	5.72	○	○	
56	石川 6	3	26	7	19	27%	73%	1	7.0	2.85	○		
57	石川 10	3	3	1	2	33%	67%	4	8.0	3.69	○		両
58	石川 11	3	6	2	4	33%	67%	2	7.5	4.40			
59	石川 12	3	1	0	1	0%	100%	4	6.5	2.52			
60	石川 17	3	4	0	1	0%	25%	4	8.0	3.90			
61	石川 15	3	5	2	3	40%	60%	1		3.78	○		両
62	石川 22	3	4	4	0	100%	0%	2	5.0	1.76			
63	石川 26	3	1	1	0	100%	0%	4	6.0	3.00			
64	石川 29	3	2	0	0	0%	0%	3					
65	石川 78	3	6	0	3	0%	50%	1～2		5.76			
66	石川 98	3	8	0	6	0%	75%	1～2		3.86	○		
67	石川 119	3	20	13	7	65%	35%	2		6.49	●	●	
68	平沼吹上 1	3	2	1	1	50%	50%	1	18.0	12.05	○		
69	平沼吹上 2	3	14	0	14	0%	100%	1	15.0	6.66	●		両
70	井出	3	9	6	3	67%	33%	1～2	10.5	6.63		●	
71	段崎	3	6	0	0	0%	0%	3		2.85	○		
72	秋葉林 1	3	31	5	19	16%	61%	1～2	9.0	5.99	●		両
73	東原 1	3	17	0	17	0%	100%	1～2	15.0	12.96	○	○	
74	東原 2	3	7	0	7	0%	100%	1～2	13.3	6.67		○	
75	東原 5	3	33	0	33	0%	100%	1～2	20.0	5.61	○		
76	清水柳北 2	3	36	0	36	0%	100%	1	8.9	6.36	○		
77	清水柳北 3	3	41	0	41	0%	100%	1	8.5	4.94	○		
78	本宿上ノ段 1	4	4	4	0	100%	0%	1	13.7	5.33	○		
79	本宿上ノ段 2	4	4	2	2	50%	50%	1	13.4	9.36	○	●	
80	下土狩西 1	4	11	5	6	45%	55%	2		16.00	●	○	
81	原分	4	43	3	38	7%	88%	2	17.0	12.75	●	●	
82	上出口 1	4	12	5	4	42%	33%	1		4.05	○	○	
83	生茨沢	5	6	1	5	17%	83%	1	9.0	6.47	○		
84	夏梅木 6	5	14	4	10	29%	71%	2	11.1	9.26	●	○	両
85	夏梅木 8	5	2	0	2	0%	100%	2		5.54	○		
86	夏梅木 9	5	9	0	9	0%	100%	2	11.0	9.44	○		
87	夏梅木 16	5	1	0	1	0%	100%	2	12.0	6.60	●		
88	小平 B1	5	13	3	10	23%	77%	1	14.0	6.76			
89	赤王山 1	5	6	0	4	0%	67%	2	10.5	5.58	○		
90	赤王山 2	5	6	0	6	0%	100%	1～2	13.0	4.56	●		
91	田頭山 1	5	10	0	10	0%	100%	2	10.8	4.35	○		
92	田頭山 2	5	2	0	2	0%	100%	2	8.8	1.99	○		
93	田頭山 3	5	5	4	1	80%	20%	1	11.0	5.31	●		両
94	柏谷 102	5	8	0	8	0%	100%	2		6.00	○	○	
95	柏谷 103	5	1	0	1	0%	100%	3		5.70			
96	柏谷 104	5	8	4	4	50%	50%	3		3.70	○		
97	柏谷 122	5	1	0	1	0%	100%	3		4.90			
98	柏谷 125	5	9	0	9	0%	100%	1		6.00			
99	柏谷 126	5	1	0	1	0%	100%	2		2.20		○	
100	柏谷 D15	5	1	0	1	0%	100%	3		3.00		○	
101	柏谷 D24	5	1	0	1	0%	100%	4		3.45	○		
102	日守中里 11	6	1	0	1	0%	100%	4		4.80			
103	大北 1	6	1	1	0	100%	0%	3		9.30			
104	大北 23-2	6	1	1	0	100%	0%	3		0.70	●		
105	大北 34	6	1	1	0	100%	0%	3		2.70			
106	大北 36	6	1	1	0	100%	0%	3		2.10			
107	大北 37	6	1	1	0	100%	0%	3		2.20			
108	天神洞 1	6	12	0	12	0%	100%	1		5.60	○		
109	天神洞 3	6	2	2	0	100%	0%	1		6.72	○		
110	天神洞 4	6	7	0	7	0%	100%	2		5.52	○		
111	大平小山	6	10	3	7	30%	70%	1		6.50	○		
112	芋ヶ窪 1	6	6	2	4	33%	67%	1		9.45	○		
113	芋ヶ窪 2	6	6	0	6	0%	100%	2		10.46	○	●	
114	芋ヶ窪 5	6	1	0	1	0%	100%	1		5.07			
115	芋ヶ窪 6	6	3	1	1	33%	33%	1	8.0	3.31			
116	平石 4	6	18	11	7	61%	39%	3	12.2	10.43	○		
117	花ヶ崎	6	2	2	0	100%	0%	1	30.0	9.12	○		
118	富士見夫婦塚	6	3	2	0	67%	0%	2	14.5	7.95			
119	平沢 1	6	37	12	25	32%	68%	1			○	○	胡
120	別所 1	6	3	1	0	33%	0%	2	13.0	6.64	○		
121	別所 2	6	2	1	0	50%	0%	4		13.32	○		
122	井田松江 18	6	9	3	6	33%	67%	1～2	11.0	13.80	●		両
123	井田松江南 1	6	5	5	0	100%	0%	2	11.5	9.35	○		

時期区分　1：TK43 ～ TK209（Ⅲ期中～後）、2：TK217（Ⅲ期末～Ⅳ期前）、3：TK46 ～（Ⅳ期後）、4：時期不明　　※不確定なものは、新しい時期とした

地域区分　1：富士川西岸、2：富士山麓、3：愛鷹山麓、4：黄瀬川流域、5：箱根山西麓、6：伊豆

●飾大刀・金銅装馬具、○大刀・鉄製馬具、両：両頭金具、胡：胡籙金具

石室面積 =（最大幅 + 最小）/2× 石室長　（※横穴墓は静岡県考古学会 2000 に準拠）

ことがうかがえ、規格性の傾向についても同地区内では1期と2期が同様であることが看取できる（第17表）。また、富士山麓地区及び愛鷹山南麓地区の東側（高橋川以東）は特に規格性を持つ副葬鏃群が集中する。原分古墳のように鉄鏃流通に関わるとされる鉄鏃多量副葬古墳被葬者の中でも、鉄鏃製作や鉄鏃の集約・分配により近い立場にいる者が、この両地区にいた可能性を考えたい。

なお、この両地区は東駿河の中でも特に大型の無袖石室墳が見られる地域であることも注目できよう。中原古墳の所在する富士山南麓では、鉄鏃流通・生産の中核的な役割を果たす被葬者と地域で主導的な役割を果たした被葬者が並立していたとみられる。

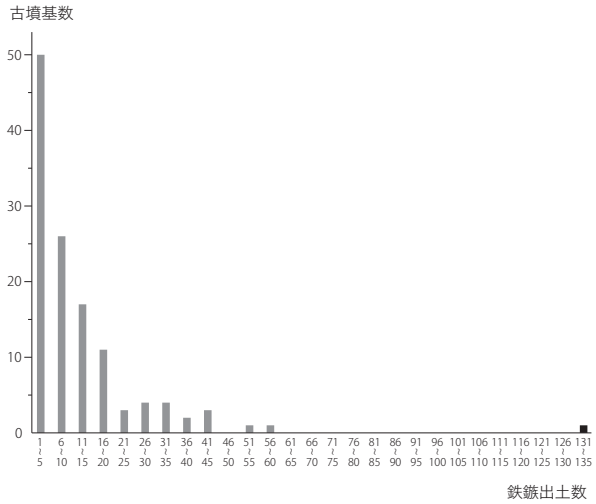
(2) 鏃構成

中原4号墳では、出土鏃全体のうち平根が約4割を占める。ただし、出土位置別の様相はそれぞれ異なり、Bエリアは平根のみの構成、いっぽうCエリアは尖根のみで構成される。A・E・Fエリアは尖根と平根で構成されるが、Aエリアは尖根が主体、EエリアとFエリアは平根数が尖根を上回る。

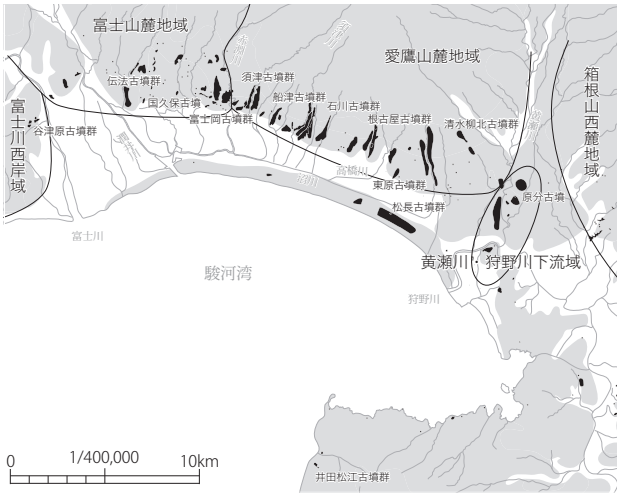
このうちA・Bエリアは初葬、Cエリアは追葬、EエリアとFエリアは初葬と追葬が混在すると考えたが、E・Fエリアの平根のうち幾つかは初葬に伴う可能性があることを勘案すると、中原4号墳における初葬時の副葬鏃は平根鏃が尖根鏃と拮抗するか、上回る数の構成であったとみられる。一方、追葬は尖根のみの鏃構成、あるいはこれに数本の平根が加わる構成であり、鉄鏃から見る限り、初葬者と追葬者が同質であったとは捉えがたい。さて、5世紀末頃には、後の正倉院御物箭に見られるような、多数の尖根に少数の平根を組み合わせて一束とするシステムの基礎が形成されたといわれ（関1986）、古墳時代後期では「多数の尖根＋少数の平根」の鏃束の副葬が多いことが諸先学により指摘している。東駿河でも概ね同様であるが、平根は少量ながらも多種といわれている（長谷川2003）。尖根を主体とする4号墳の追葬時の副葬鏃はこの傾向にそったものと理解できる

一方、初葬時の副葬鏃群は、多種多量の平根を含み、古墳時代後期の一般的な傾向とは異なる様相を示す。もっとも、「多数の尖根」を合わせもっていることも事実であり、中原4号墳の初葬時の副葬鏃は、「多数の尖根＋少数の平根」という後期古墳一般の鏃構成と多種の平根という東駿河の特徴のうえに、さらにより多くの平根が加わった結果「多数の尖根＋多種多量の平根」という鏃構成になったものと考えられる。

鏃構成に多くの平根を加えた背景には、平根鏃の持つ象徴性を被葬者が重視していたためとみられる。古墳時代後期の平根鏃について、鈴木は中央政権や他の集団との関係、威信財的な性格や基層的儀器としての性格といった中期の副葬鏃にみられる意味づけが一部に継承されていると指摘している（鈴木2003）。中原4号墳出土の平根鏃のうち、方頭式や圭頭式、撫関三角形式は、西日本に分布傾向を持つ形態であり、6世紀代の当地では類例が少ない形態である。水野は、鉄鏃は基本的には長距離交易の対象にはならないものの東海地方における方頭式は北九州・瀬戸内との交渉を想定すべきと指摘し（水野1995）、大谷は、沼津市秋葉林1号墳から出土した飛燕式鏃を巡る論考を展開するなかで、東駿河に



第201図　東駿河・伊豆における鉄鏃出土数



第202図　地域区分

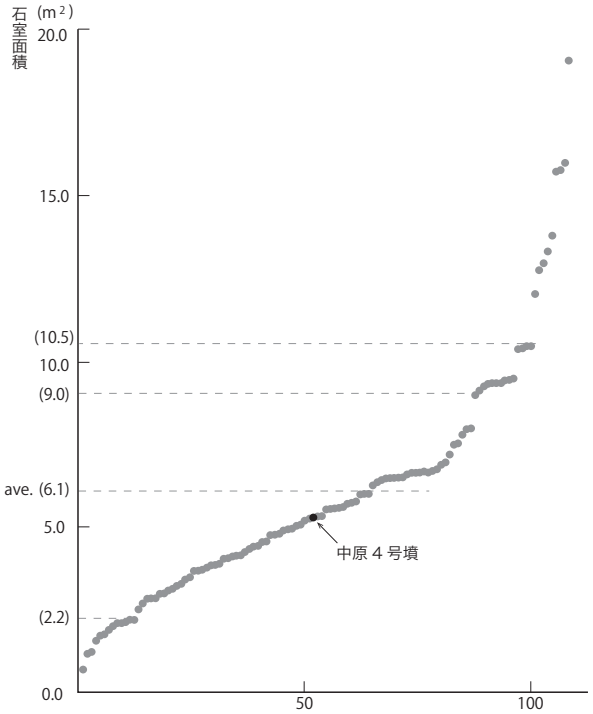
は北部九州などから鉄鏃型式の最新情報が伝播していた可能性が高いことを指摘している（大谷 2010）。中原4号墳出土のこれらの鏃も西日本各地との交渉によりもたらされた可能性があり、被葬者が他地域との関係を示すものとして、これらを鏃群に加えていたと考えられよう。なお、瀬戸内沿岸地域に共通する特徴として、平根の種類が豊富であり、岡山平野では県岩田14号墳にみられるように大小が組み合わされる事例も多いと指摘される（尾上 1993）。中原4号墳も平根の種類が豊富であることに加え、重抉柳葉式の423と424、長三角形式の433と434、撫関三角形式の450と451のように大小の組み合わせとなるものや、圭頭式の452と453、五角形式の447と448のように細部の意匠が若干ことなる鏃の組み合わせも見られる。あるいは、鏃の形態のみならず、保有のセット関係にも他の地域からの影響を受けている可能性も考えられる。

また、Bエリアの鏃束は、大刀とともに被葬者の被葬者の傍らに副葬されており、他の鏃束とは異なる扱いを受けている。大谷は無頸式の鏃は、伝統的な形態の保持・意味の再生として極端に重視する古墳の存在を指摘しているが（大谷 2003）、短頸鏃を含む平根鏃のみで構成されるBエリアの鏃束も、伝統的な葬送儀礼を踏襲した基層的儀器として他の鏃とは異なる扱われかたをしていたと考えられる。Cエリアも同様に大刀とともに被葬者の傍に副葬された鏃束であるが、尖根のみで構成される。一見すると被葬者近傍の副葬品組成として、追葬者は初葬者を踏襲しているかのように見えるが、副葬鏃に込められた意味合いまでも踏襲するものではなかったといえる。

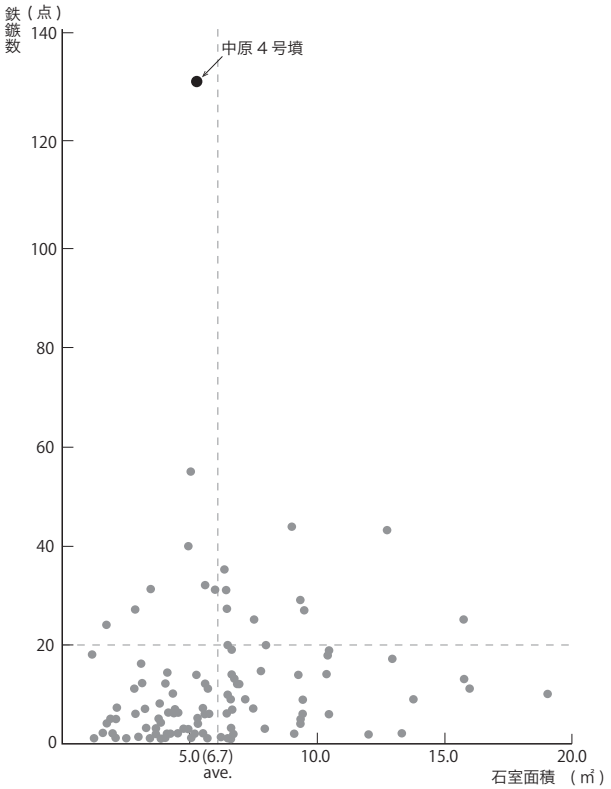
なお、中原古墳群では3号墳と6号墳でも鉄鏃が出土した。このうち、尖根のみで構成される6号墳はこの時期の一般的傾向に概ね沿っており、4号墳追葬者に近い被葬者像がうかがえる。一方で3号墳は短頸鏃を含む多種多様の平根と多種多量の尖根で構成される鏃束であり、平根の類似形態が大小の組み合わせを持つなど、4号墳初葬者に近い被葬者像がうかがえる。

さて、先に記したとおり古墳時代後期においては「多数の尖根＋少数の平根」の鏃束の副葬が多いことが指摘されるが、畿内では首長墳は尖根、群集墳では平根鏃が多く副葬されるという指摘もある（豊島 2002）。

そこで、次に東駿河における鏃構成と階層や鏃の保有量等との関連性の有無をみることにしたい。東駿河において石室規模や副葬品から有力な被葬者像がうかがえる古墳をみると、谷津原7号墳、船津寺ノ上1号墳、中



第203図　鉄鏃出土古墳・横穴の埋葬施設面積



第204図　埋葬施設の規模と出土鉄鏃数

里大久保古墳、原分古墳のように「多数の尖根＋少数の平根」という鏃構成となるものが見られる一方で、横沢古墳や船津Ｌ 62 号墳、大阪上古墳のように出土鏃の３割以上を平根が占めるものや、かぐや姫古墳、石川 119 号墳のように平根が主体となる古墳も見られる。小規模墳では、尖根のみの出土や、平根のみが出土する事例が混在するなど一様ではない。

鉄鏃の副葬量からみると、平根が鏃構成の主体となる事例は出土鏃総点数が数本程度の場合が多く、十数本以上鉄鏃が出土している場合の多くは「多数の尖根＋少数の平根」となる傾向にあると言えるが、かぐや姫古墳と石川 119 号墳のように平根が主体となる鉄鏃多量副葬古墳や、尖根のみが数点するような事例もみられ、鉄鏃の保有量と鏃構成の間にも関連性は見出しがたい。

遠江では一定以上の階層については「多数の尖根＋少数の平根」の構成が多いものの、多様な鏃束構成があり、階層性と鏃構成が必ずしも一致しないことが指摘されていが（田村 2003）、東駿河における鏃構成は、遠江と同様に階層性と鏃構成に密接な関係性があったとは言い難く、さらには鏃の保有数との相関関係も見いだせない。中原４号墳は東駿河では平均的な石室規模であるが、副葬品からは初葬時の被葬者は、階層的には上位であったとみられる。東駿河における上位階層の中には平根を主体とする鏃構成となる古墳はほかにもあり、中原４号墳の初葬時の副葬鏃が特異な事例とはいえない

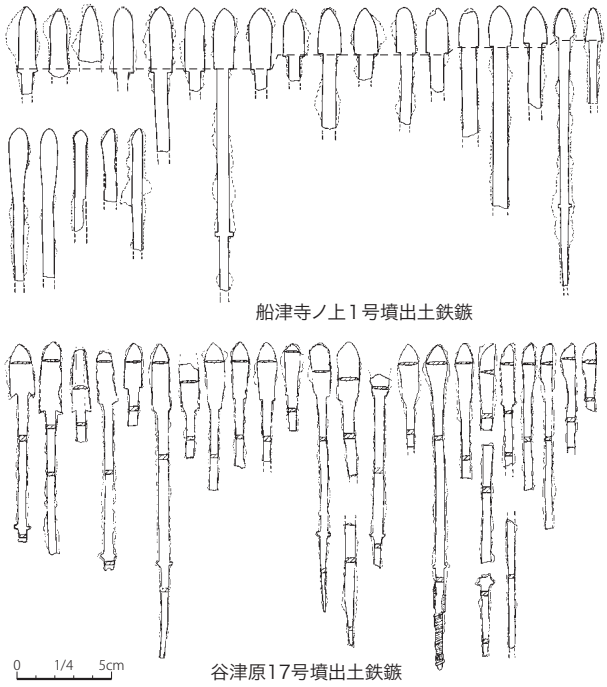
なお、束となって出土したＡエリアの鏃については、何らかの容器あるいは盛箭具に納められていた可能性も考えられるが、それらの存在を指し示すような供伴物もないため、判断はしかねる。ただし、４号墳出土鏃の鏃身部には平絹等や木質等の有機物の付着がないことから、すくなくとも鏃身部を覆うような容器や胡籙に納められてはいないと考えられる。

5　まとめ

以上、中原４号墳の出土鏃について検討したが、あらためてその特徴をまとめることで、結びとしたい。

まず、中原４号墳は東駿河では最多の鉄鏃が出土し、半数近くを平根鏃が占めることが大きな特徴である。出土位置や形態から２回の埋葬行為に伴い副葬されたものと考えられるが、そのほとんどが初葬に伴うものである。初葬時の副葬鏃群と副葬時の副葬鏃群の構成は大きく異なり、副葬鏃からみる限り初葬者と追葬者を等質視することはできない。

追葬者は後期古墳の一般的な鏃構成であり、社会的立



第 205 図　船津寺ノ上１・谷津原 17 号墳出土鏃の規格性

第 17 表　鉄鏃多量出土古墳における規格性

地区	古墳名	出土数	分類	時期 1	時期 2	時期 3
1	室ノ坂 B4 号墳	32	B			■
1	妙見 I2 号墳	24	A			▒
1	谷津原２号墳	25	C		▒	
1	谷津原６号墳	57	C	▒		
1	谷津原７号墳	29	C	▒	▒	
1	谷津原 17 号墳	26	A		▒	
2	中原３号墳	31	B	■		
2	中原４号墳	111	B	■		
2	国久保古墳	55	B		■	
2	かぐや姫古墳	20	C		▒	
2	富士岡 F22 号墳	20	B			■
3	中里大久保古墳	44	C		▒	
3	船津寺ノ上１号墳	25	C	▒		
3	船津 L62 号墳	29	A		▒	
3	石川６号墳	26	A	▒		
3	石川 119 号墳	20	A		▒	
3	秋葉林１号墳	31	C	▒	▒	
3	東原５号墳	32	B	■	■	
3	清水柳北２号墳	35	B	■		
3	清水柳北３号墳	40	B	■		
4	原分古墳	43	B		■	
5	平沢１号墳	37	C	▒		

A：多種多量、B：同種多量、C：数本単位の規格性
※ 谷津原２・６・７号墳、中里大久保古墳、秋葉林１号墳は、数本単位での規格性は高く、A・B の中間的な様相といえる。

場は東駿河における古墳埋葬者としては一般的なものであったと考えられる。一方、初葬時の副葬鏃は多種多量の平根と少量多種の尖根で構成され、他の古墳被葬者とは鉄鏃に関して異なった立場であったと言える。

静岡は北〜西関東・千葉とともにTK209形式期ごろの東日本において比較的広域に供給を始めた生産地域の候補地として指摘されている（内山2003）。中原4号墳は多量の平根と拮抗する量の尖根が出土しているが、尖根は地域的な特徴を逸脱しない規格性の高いものである。尖根の保有状況からは、中原4号墳の1回目の被葬者は鉄鏃生産あるいは流通の中枢に近い立場にいた被葬者がうかがえる。

平根の中には、短頸鏃のように東日本に分布傾向を持つものと、方頭式や圭頭式など瀬戸内〜九州との交流が考えられるもの、撫関三角形式のように畿内に分布傾向があるものが混在する。6世紀末頃には、鉄鏃の地方生産の拡大により、平根が多様化することが指摘されているが（関1986）、中原4号墳の被葬者は他の鉄鏃生産地との交流により多種多様な平根鏃を持ちえた可能性が考えられる。なお、短頸鏃を含む平根鏃のみの鏃束の存在からは、鉄鏃の伝統的な儀器としての側面も同時に意識していたこともうかがえる。明らかに他の鉄鏃より古い形態的特徴を示す腸抉片刃箭鏃も伝統的側面を象徴するものとして重視されていたのであろう。

以上、中原4号墳の初葬に伴う鏃束における多種多量の平根保有という特異性は、被葬者が鉄鏃に交流と伝統の象徴性を付加していたことがその背景にあるのであろう。鉄鏃から見た中原4号墳初葬者は、遠隔地との交流を持つ鉄鏃の生産あるいは流通に携わる立場にあり、鉄鏃の形態とその象徴性を強く意識していた人物であったと位置づけることができる。

註

1　静文研2003では、「少種」及び「多種」並びに「少量」及び「多量」を組合せて出土鏃の傾向を指摘しているが、明確な基準は設けていない。ここでは、3種未満を「少種」とし、出土鏃5本以下（東駿河における1古墳あたりの平均出土数の半分以下）を「少量」と表現する。なお、三角形式及び柳葉式については、鏃身関の形状が異なる場合は別形態として扱う。

2　各形態の帰属時期については大谷2003に基づく。

3　伊豆の横穴では7世紀後半台に圭頭式が出土しているが、鏃身は菱形状となり、6世紀以前の圭頭式とは直接つながらないものと言える。

参考文献

井鍋 誉之　2003「富士川西岸〜箱根山西麓地域」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

内山 敏行　2003「古墳時代終末期の長頸鏃−東日本における棘関長頸腸抉鏃の評価−」『部位生産の流通の諸画期』七世紀研究会

大谷 宏治　2003a「地域区分・時期区分と鉄鏃分類」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2003b「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2004　「東と西の狭間」『設立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2010「出土遺物から見た秋葉林1号墳の被葬者像」『秋葉林遺跡Ⅱ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

尾上 元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性−長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として−」『考古学研究』第40巻第1号

菊池 吉修　2008　「原分古墳出土の鉄鏃について」『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

後藤 守一　1939「上古時代鉄鏃の研究」『人類学雑誌』第54号第4号

末永 雅雄　1941『日本上代の武器』

杉山 秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8

鈴木 一有　2003「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

関 義則　1986　「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号古墳文化研究会

田村 隆太郎　2004「副葬鏃群からみた遠江の横穴式木室墳」『設立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

豊島 直博　2002「後期古墳出土鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所

長谷川 睦　2003「静岡県における鉄鏃の地域色と生産・流通」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

藤村 翔　2011「国久保古墳の評価と被葬者像」『平成13年度　富士市内遺跡・伝法国久保古墳』富士市教育委員会

水野 敏典　2007「古墳時代鉄鏃研究の諸問題−東アジアの中の鉄鏃様式の展開−」『古代武器研究』第8号

水野 敏典　1995　「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢』Ⅳ

引用報告書

甘木市教育員会　1998『下渕名子古墳群』

飯塚市教育委員会　2012『川島5号墳』

大分県教育委員会　1973『飛山』

大分県教育庁埋蔵文化財センター　2009『羽野横穴墓群』

岡垣町教育委員会　2002『東田古墳群Ⅱ』

岡山県古代吉備文化財センター　1995『川戸古墳群発掘調査報告書』

岡山県教育委員会　1982『高坪古墳』

岡山県古代吉備文化財センター　1998『段林遺跡・段林古墳』

山陽団地埋蔵文化財調査事務所　1976『岩田古墳群』

（財）徳島県埋蔵文化財センター　1994『柿谷遺跡・菖蒲谷西山B遺跡・山田古墳群A』

富士川町教育委員会　2008『谷津原古墳群』富士川町文化財調査報告書第23集

富士市教育委員会　1987『船津寺ノ上1号墳発掘調査報告書』

三島市教育委員会　1997『小平C遺跡』